



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	明治20-30年代の陸軍関係雑誌に見る体育記事
Author(s)	太田, 繁; 室星, 隆吾
Citation	東京学芸大学紀要 . 第 5 部門 , 芸術・体育, 41: 247-254
Issue Date	1989-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/4922">http://hdl.handle.net/2309/4922</a>
Publisher	
Rights	

## 明治20—30年代の陸軍関係雑誌に見る体育記事

太田 繁\*・室星隆吾

保健体育学\*\*

(1989年6月10日受理)

### 1. 序

陸軍は、明治7年(1971)に戸山学校を設置し、「体操科」を置いて軍隊体操の研究を開始した。特に、明治10年代に台頭した富強主義は、「体操」を健康面に限らず、軍事的な基礎体力の養成手段として考えるようになったのである。このため、学校体育にも、この軍隊訓練の方法が「兵式体操」として取り入れられている。明治19年、この「兵式体操」は、文部大臣であった森有礼が、表向きは道徳教育として取り入れたものであるが、その実は徴兵前軍事訓練であった。

このような気運の背景には、軍事面における欧米の列強諸国に比した日本人の劣悪な体格・体力問題があったのである。壮丁の体格・体力の改善は、その後、日清(明治27年)・日露(明治36年)の両戦争を経験して、増々その必要性が認識され、戸山学校ではこの間、体操研究と共に軍医を中心とした体力科学の研究が進められていったのである。

体力科学の研究がわが国において本格的に行われたのは、大正13年(1924)に「国立体育研究所」が設立されてからである。しかし、「体育研究所」の研究者であり、主要な役割を研究、行政の両面から果たした吉田章信は、軍医であると共に戸山学校の教官であり、戸山学校の彼以前の研究者の影響を受けていたわけである。つまり、戸山学校では、「体育研究所」設立以前から、体力科学の研究にすでに着手していたわけで、その蓄積は、明治10年代にまでさかのぼることができる。戸山学校では、これらの研究の集成ともいえる「生理衛生学摘要」を明治42年に出版し、大正3年には「日本人の体格及体力」を出版している。これらは、明治20年代に始まる陸軍を中心とした体力科学の蓄積を踏まえていると考えられるが、その間の資料には不明な点が多い。

そこで、本研究は、明治20年代、30年代に陸軍の発行した「偕行社記事」<sup>※1)</sup>、「軍医学会雑誌」<sup>※2)</sup>を資料として、この間の体格・体力問題に関係した記事を調査し、体力科学の研究の動向を明らかにすることを目的とした。

---

\* 東京学芸大学研究生

\*\* 東京学芸大学(184 小金井市貫井北町4-1-1)

## 2. 陸軍戸山学校における「体操科」の「生理・衛生学」に関する授業科目

「陸軍教育史」(明治別記第十二巻陸軍戸山学校之部)<sup>9)</sup>を中心に明治20年代、30年代の陸軍戸山学校の教育組織、学科内容を分析すると以下のようにまとめることができる。

陸軍戸山学校は明治6年の兵学寮戸山出張所の創立に始まり、明治7年戸山学校として発足した。明治16年に「体操」、「射撃」が専科となり、明治18年には第1期体操学生が召集されている。明治16年の条例改正から、明治19年の条例改正までの間、第1期体操科下士学生(18.4.1~18.7.19)に「衛生学」が、第2期体操科下士学生(18.9.15~19.1.31)には、「衛生及解剖学」が初めて示されている。明治19年(3月)の条例改正では、「戦術科」、「射撃科」、「剣術科」、「体操科」の4科が設けられ、「体操科」学生に「衛生学」(附解剖学大意)が示され、また、「戦術科」学生にも「衛生学」、「衛生学概略」が初めて示されている。明治20年(10月)の条例改正では、「体操科ハ体操及剣術教官ヲ養成スルノ目的ヲ以テ各兵科ノ少尉及下士ヲ学生トス」となり、初めて士官学生が入校している。そして、士官学生には、「軍人衛生学」、「生理学」が、士官学生には「衛生及解剖概論」が示された。また、明治21年以降入校の下士学生にも「軍人衛生学概論」が示されている。明治22年に陸軍軍医学校から出版された「陸軍衛生教程」の序の中には、これ以前に、軍医や戸山学校医官が翻訳編纂した「軍陣衛生学」や「衛生学」の書が数十種あり、教科書や参考書に用いられている<sup>10)</sup>、と述べられている。この時期の「衛生学」関係の教科書には、これらの軍医学校で翻訳編纂されたものが教科書として用いられていたと考えられる。

明治24年(2月)入校生には士官学生に「生理学」、「衛生学」、下士学生には、「衛生概論」が示されているが、明治24年(9月)入校生には士官学生に「生理学教程」、「陸軍衛生教程」、下士学生には「軍人衛生学概論」が示され、明治27年入校生まで続いている。おそらくこの時期に、「衛生学」関係の教科書が変更され、新たに、明治22年に軍医学校で出版された「陸軍衛生教程」が使用されたと思われる。内容は、この著の序文の中に、「軍陣衛生学ノ極メテ簡単ナルモノヲ選述セシメ以テ教科ノ備忘録トス」<sup>10)</sup>とあるので「軍人衛生学」をその内容としており、また「纂訳」ではなく、「真ノ著述」<sup>10)</sup>であると述べられているところから、それまでの訳本の教科書から独自で作成した教科書への転換がうかがわれる。

明治29年には条例が改正されて、「体操科」は「体操剣術科」となり、士官学生には「生理学」、「陸軍衛生学」、下士学生には「衛生学」(30年「陸軍衛生学」)が示された。さらに明治31年の条例改正では「『軍人衛生学概論』、『生理学教程』ヲ改纂シ、…學術研究ノ材料ニ充テタリ」<sup>10)</sup>とあり、士官学生に「生理学」、「陸軍衛生学」、下士学生には「陸軍衛生学」が示されている。また、明治32年には「教則ヲ定ム」とあり、「体操剣術科学生下士ノ為メニ軍人衛生学概論ヲ改纂シテ軍人衛生生理学要旨ト改メタリ」とある。(戸山学校之部の別の箇所では明治31年の学科として「生理及衛生ノ大意」とある。)明治29年の「陸軍戸山学校編制表」によると、「体操剣術科」の教官の中に本部附軍医が2名兼任している。この年から軍医担当による授業が始まったと考えられる。さらに、教科書も下士学生用の「軍人衛生学」の改纂が行われ、「軍人衛生生理学要旨」に変わっているが、これに関連した記事が明治31年(93号)の「軍医学会雑誌」<sup>8)</sup>に見られる。この記事の内容は、衛生学を専攻していないものが下士用の衛生学の教科書を編纂していることに対する批判である。これはおそらく戸山学校での改纂の動きを指しているものと思われるが、明治29年に軍医が教官を兼務して以来、戸山学校での独自の授業、研究の方向が現れてきたのではないかと推測される。明治31年の学生の教育綱領、明治32年の教則には、「生理及衛生学ハ専ラ体操剣術科ニ必要ノ事項ノミヲ説述スルヲ要ス」とする「生理衛生学」授

業への制限をうかがわせる記述がある。この一方、明治31年の条例改正の目的には、「諸科学術ノ調査研究ヲ為シ」とあり、明治33年の条例改正では、「学生ノ在校日数ヲ減シ各教官ノ学術研究、教育準備等ニ充分ノ余裕ヲ得セシメタルモノ・・・学術ノ調査実験ノ企図ヲ円満ナラシムル・・・」とあって、教官の研究に対しては、その充実を意図する記述が見られるのである。

明治36年の条例改正では「体操剣術科」は「体操科」と改められ、その目的には、「学生ヲシテ教範ニ基ツキ生理衛生ニ鑑ミ体操剣術ノ実習及研究ヲナサシメ」と記されている。また明治43年の体操科学生の教育の目的の中に、「体操ハ従来巧妙ノ動作ヲ以テ熟達ト見做スノ誤リヲ解キ気力ノ養成筋肉ノ發育ヲ図リ・・・」と記され、体操研究の目的のために体操器械を増設したとある。これらの一連の記述から、明治30年以降生理・衛生学の研究の方向が、体操を手段とした体格・体力の増強に向けられていることを推測することができる。すなわち、戸山学校での体力科学の研究は、軍医による授業担当（明治29年）を契機として、しだいに活発化していったと考えられるのである。

「偕行社記事」の中には、明治23年(35号)「体操用各種器械ノ効用」<sup>15)</sup>、明治25年(80号)「体育要論」(連載)<sup>16)17)</sup>が戸山学校の教官であった大谷清(歩兵中尉)によって書かれているが、「体育要論」では、「体育トハ体力養成ノ学ニシテ・・・」,「体育ノ要素ヲ概言セハ生理ニ乖戾セサル所ノ力技ナリ又衛生運動ナリ」と述べられている。戸山学校では、明治20年代に早くも体操と生理衛生学を結びつけた授業の体制を整えたわけであるが、これらの記述からも生理衛生学の研究が体操を通じて、体格・体力の発達を目的としたものであったことが、推測されるのである。

### 3. 陸軍関係雑誌にみる体育記事

#### 3.1 明治20～30年代前半にみる体育記事

明治20～30年代前半の「軍医学会雑誌(以下「軍医」と略す)」では、主に軍人の体格とその測定に関する記事が散見できる。まず、飯沼徳造が、明治21年(1889)「法人ノ矮小ナル其座法ノ宣ヲ得サルニ因ル」(「軍医」31号, 34号)の中で日本人の低身長の原因を正座の習慣など文化的背景、あるいはその資質に求めようと試みている。同様の試みは、明治30年(1897)、細堀謙治によって、「軍医」81号「本郷連帯区壮丁ノ身長附邦人ノ矮小論ニ就イテ」<sup>10)</sup>なされている。

明治30年「軍医」80号「北海道ニ於ケル徴兵検査成績」<sup>24)</sup>において、吉田米五郎は、徴兵検査結果をもとに、労働と体格発達について考察している。その中で、肉体労働者は都市生活者に比較して明らかに「筋骨共ニ發育善良」<sup>24)</sup>であると結論している。また同年、蘆原信之は、「地方幼年学校ニ召集スベキ生徒ノ身長」<sup>5)</sup>(「軍医」80号)で、学齢期児童の身長発育度の推測を試みている。豊田修造は、「和歌山連帯区内学齢期児童体育調査」<sup>22)</sup>(「軍医」89号)を通して発育加速現象について考察し、さらに、学齢期児童の体格調査の意義は、将来「富国強兵タル其強兵ヲ得ントスル」<sup>20)</sup>に必要なものとしている。同年、「軍医」80号「徴兵身長低減ニ関スル意見」<sup>22)</sup>の中では、明治29年陸軍省訓令「陸海軍徴兵身長低減表」によって始まった徴兵検査の減寸選定に関連して、徴兵検査で定尺に満たない者の増加が深刻化していることを指摘している。同様の指摘は「本郷連帯区壮丁身長附邦人矮小論ニ就テ」<sup>10)</sup>にも見られる。

表1 偕行社記事に見られる体育記事(明治20~30年代)

西暦	明治	号	記事名	著者	記載頁
1890	23	28	労働ノ景況ニ由リ食物ヲ増加スルノ必要ヲ論ス	田中弥太郎	5-8
1890	23	35	体操用各種器械ノ効用	○大谷清	1-7
1892	25	80	体育要論1	○大谷清	5-14
1892	25	81	体育要論2	○大谷清	5-15
1892	25	84	兵装ノ重量ニ就テ	山野新太郎	1-16
1892	25	93	背囊改正ノ説	丹羽清之助	1-8
1893	26	121	吊袴帯ト肺活容ノ関係	島村信司	69-74
1898	32	196	呼吸器病預防法トシテ軍隊浴ノ改正ヲ望ム	岡安得太郎	1-5
1899	32	219	器械体操及外傷ノ関係附改良意見	秋山春斎	71-80
1899	32	222	日射病予防法	田中弥太郎	41-50
1899	32	226	器械体操及外傷ノ関係附改良意見	秋山春斎	91-96
1899	32	228	器械体操及外傷ノ関係附改良意見	秋山春斎	63-68
1900	33	255	衛生ト生理ニ就テ	渡邊龍吉	101-102
1901	34	257	衛生ト生理ニ就テ	渡邊龍吉	93-95
1901	34	258	衛生ト生理ニ就テ	渡邊龍吉	63-64
1901	34	277	器械体操劣等者教育近況報告	鶴澤総司	91-94
1902	35	293	戦闘ト體力トノ関係ヲ論シ体操劍術ノ奨励ヲ望ム	○篠尾明濟	21-34
1902	35	294	戦闘ト體力トノ関係ヲ論シ体操劍術ノ奨励ヲ望ム	○篠尾明濟	6-19
1902	35	301	徴兵検査ニ就テ	中尾新寿	53-60
1902	35	304	軍隊體育ノ必要ヲ論ス	○後藤良男	13-20
1903	36	305	都市生活ノ體格發育ニ及ホス影響	飯島茂	5-11

注) ○印は、陸軍戸山学校関係者を示す。

明治31年、「軍医」96号「名古屋陸軍幼年学校生徒ノ一学期ニ於ケル身体發育」<sup>11)</sup>では、身体發育と定期的な運動実施の関係について、「發育機ニ妨害ヲ興ヘサル限りハ体育ヲ励行セシニヨリ入校後頓ニ胸郭ノ拡張ヲ来シタル」<sup>11)</sup>と報告されている。

体格の測定は、明治20年代の「軍医」記事中にも「本邦人ノ平均身長ニ就テ」(「軍医」50号)や「早婚者ノ壮丁体格ニ就テ」(「軍医」55号)などに見られる。しかし、その中では、体格発達に影響を及ぼす生活状況や運動との関係などについては述べられていないのである。また、明治30年代に入ってその記載数も増加している。さらに、明治31年には、「体格検査器械ニ就テノ希望」(「軍医」98号)や「握力検査器械考案」(「軍医」93号)などの測定器械に関する記事も初めて登場しているのである。これらの記事をみると、当時の壮丁の体格への関心の高さが推察できよう。

「偕行社記事(以下「偕」と略す)」を見ると、秋山春斎は明治32年(1899)、「器械体操及外傷トノ関係附改良意見」(219,226,228号)<sup>23)4)</sup>を発表している。これは、前年「軍医」に「器械体操ト外傷ノ関係」<sup>1)</sup>(101号)に発表した器械体操の外傷とその原因を調査して、改良意見を加筆した記事内容であった。その中で、器械体操中の外傷予防策としては、補助の仕方的重要性と共に「体育ノ教育ニ就テ教官ノ心得ヘキ要領トシテハ易ヨリ難ニ入り簡ヨリ繁ニ移リ人身生理ニ乖戾セスシテ兵ニ之レヲ習得セシムルニ在リ<sup>4)</sup>」と述べている。陸軍関係記事中に、軍医によって体育の改善方法に関する指摘がなされたのはこの記事が初めてであった。この時期、戸山学校での軍医による授業担当を考え合わせると、生理学に基づいた体育方法に対する軍医の関心の高さが伺える。

明治33年(116号)には「台湾行軍ノ体温脈拍呼吸ニ及ホス関係」<sup>21)</sup>が発表されている。これは、行軍が身体に及ぼす影響を克明に測定記録し、生理衛生面から考察を加えたものである。このように、軍務の身体に及ぼす影響を衛生面から取り扱ったものは、明治20年代の雑誌記事

にいくつか見ることができる。それらは、「偕」84号「兵装ノ重要ニ就テ」(明治25年)、「偕」93号「背囊改正ノ説」(明治25年)「軍医」76号「行軍ニ就テ」(明治29年)などである。

表 2 軍医学会雑誌に見られる体育記事

西暦	明治	号	記 事 名	著 者	記載頁
1889	22	31	邦人ノ矮少ナル其座法ノ宣ヲ得サルニ因ル	飯沼徳造	1-3
1890	23	34	邦人ノ矮少ナル其座法ノ宣ヲ得サルニ因ル	飯沼徳造	5-8
1891	24	50	本邦人ノ平均身長ニ就テ	毛利隆尚	24-25
1892	25	55	早婚者ノ壮丁體格ニ就テ	長曾我部駒次	50-54
1896	29	70	労働ト食科トノ関係ニ就テ	笠島省吾	466-69
1896	29	72	澎湖島馬公城内土民身体検査成績	長谷川春朗	45-46
1896	29	73	潔斎者奥村明堂ノ体力検査成績	高橋静海	320-29
1896	29	76	行軍ニ就テ	千口 亮	701-717
1896	29	78	劉公島住民ノ體格検査成績	松本繁正	1112-123
1897	30	80	北海道ニ於ケル徴兵検査成績	吉田米五郎	212-23
1897	30	80	地方幼年学校ニ召集スベキ生徒ノ身長	蘆原信之	73-75
1897	30	80	徴兵身長低減ニ関スル意見	矢嶋柳三郎	75-78
1897	30	81	呼吸縮張ノ差ノ測定法ニ就テ	河野豊蔵	223-25
1897	30	81	本郷聯隊區壯丁ノ身長附邦人矮小論ニ就イテ	細堀謙治	554-63
1897	30	84	軍靴改良意見	河野豊蔵	564-67
1897	30	89	和歌山聯隊區内学齡兒童体育調査	豊田修造	1237-43
1898	31	93	握力検査器械考案	堀口朧助	397-401
1898	31	96	名古屋陸軍地方幼年学校生徒ノ一学期間ニ於ケル身軀發育	森岡市太郎	829-43
1898	31	98	體格検査器械ニ就テノ希望	松倉 茂	1110-112
1898	31	101	器械體操ト外傷口ノ関係	秋山春齋	221-235
1900	33	110	生蕃人ノ軀格	櫻井 満	182-85
1900	33	112	臺灣守備兵ノ一年間ニオケル軀重ノ消長	岡善次郎	423-28
1900	33	116	身軀發育ハ出生時季ニ関係アルヤ附身長ト體重	青木 一郎	989-93
1900	33	116	臺灣行軍ノ軀温脈搏呼吸ニ及ホス関係	高橋新三	994-1004
1901	34	121	国民體格ノ将来	中村秀樹	519-20
1901	34	122	戸山学校軀操劍術科学生軀力増減ノ理由	○遠藤道孝	589-593
1901	31	124	朝鮮人ノ軀格ニ就テ	飯島 茂	814-827
1902	35	127	身長ノ日差ニ就テ	山田太良	235-41
1902	35	130	[アイヌ] 壯丁體格所見	後藤角太郎	737-39
1902	35	130	一年間體重ノ消長	岡善次郎他	647-49
1906	39	152	日本兵ト露国兵トノ體格比較	日比野秀次郎	668
1906	39	154	支那人體格検査成績	前田保十良	960-965
1906	39	155	夏期行軍中ノ給水ニ就テ	津田侃二	1211-212

注) ○印は、陸軍戸山学校関係者を示す。

明治33年には、体格の生理的変動に関する記事がみられる。岡善次郎は、「軍医」112号「台湾守備兵ノ一年間ニ於ケル体重ノ消長」<sup>14)</sup>の中で、医療や衛生における効果の判断材料として体重測定が用いられているが、「体重消長ヲ観テ直チニ何ニ因ル結果ナリト断定スルハ早計ナル」<sup>14)</sup>と述べている。すなわち、体重の生理的な変動を考慮にいれて判断するべきであると示唆している。明治34年(1901)戸山学校軍医であった遠藤道孝は、「軍医」122号に「戸山学校体操剣術科学生体力増減ノ理由」<sup>6)</sup>を発表した。その中で、学生の定期的な運動実施は、上膊囲、大腿囲、胸囲の測定値は向上したが、体重だけは途中から減少したと報告し、研究の余地があるとしている。これに対して、明治35年岡善次郎は、「軍医」130号「一年間ノ体重ノ消長」<sup>13)</sup>の中で、前出の遠藤の研究期間は、一年間を通じて、ちょうど体重が生理的に減少する期間であったものであると指摘している。一方、身長の日における生理的変動についても、明治35年(1902)、山田太良によって「軍医」127号「身長ノ日差ニ就テ」に発表されている。

以上から、明治20～30年代前半雑誌記事にみられる体育記事には、運動の体格に及ぼす影響や軍医たちの体育の研究に対する積極的な取り組む姿勢を伺うことができる。しかしながら、体格の把握にその中心課題があったと推察できるのである。

### 3.2 明治30年代後半の体育記事

明治34年以後、体育記事の中には、外国人との比較から、体格の改善を望む記事が見られるようになる。明治34年(1901)、中村秀樹は、「国民体格ノ将来」<sup>12)</sup>（「軍医」121号）で、外国人と日本人を比較して「勇武ト厳正」は遜色ないが「威容ニ至レハ未タ其勇譚ヲ標章スルニ於テ聊力遺憾ナキ能ハスト云フ主トシテ軀幹長大ナレサルカ為ナリ」<sup>12)</sup>として身長の低さを指摘している。同年には「朝鮮人ノ体格ニ就テ」（「軍医」124号）が発表されており、日本人との体格比較が試みられている。また、戸山学校軍医であった篠尾明彦は同年の「戦闘ト体力トノ関係ヲ論シ体操剣術ノ奨励ヲ望ム」<sup>19)20)</sup>（「偕」293,294号）に、欧米人の体格表を掲げて日本人との比較をしている。その結果、「我邦人ノ体力ハ遺憾ナカラ彼欧米人ニ及ハサルコト遠シト云ハサルヘカラス身長、体重、胸囲、筋力、寿命等皆彼レニ及ハサレハナリ」<sup>20)</sup>と述べている。さらに「邦人ノ体格ハ・・・中略・・・養フニ法ヲ以テスレハ其体力ヲ増進セシメ待ルコト学理ノ征認スルトコロナルニ於テヤ然ラハ之ヲ為ス奈何唯体育ニ努力スルニ在ルノミ」<sup>20)</sup>と体格・体力の改善には、体育奨励の必要性を説いている。その体育の方法については、負荷の漸進性を考慮するなどして「適切ナ運動法」が必要であり、特に、「実施ノ方法順序ニ注意シ殊ニ生理衛生ニ顧慮シテ体力ノ増進ヲ謀ラハ其効果期スヘキナリ」<sup>20)</sup>と論じている。篠尾は、体育の教材としては、前出の遠藤道孝が、「軍医」122号（明治34年）に発表したデータをもとに体操と剣術を推奨している。戸山学校教官であった後藤良男は、「軍隊体育ノ必要性ヲ論ス」<sup>7)</sup>（「偕」304号）の中で、篠尾と同様、体格・体力改善には体育の重要性を指摘した上で、その方法について「体育ノ要ハ人ノ身体発達ノ度ニ応シテ運動ノ種類及ヒ其方法手段ヲ異ニスヘキニアル」<sup>7)</sup>、さらに、「生理衛生ハ体育ノ基礎ナリ之ヲ知ラスンハ如何ニ体操ニ熱中スレトモ其只形式ニ流レンノミ皮相ノ進歩ニ終ワランノミ」<sup>7)</sup>と述べている。ここでいう、「生理衛生」とは、科学的なトレーニング方法など、いわゆる今日の運動処方やその基礎となる運動生理学や解剖学を指していたと考えられる。

これら一連の記事からもわかるように明治30年代後半になると、体格・体力改善のために、体育が奨励され、また、その科学的な方法の必要性が求められていたのである。このような傾向は、「国民体格ノ将来」（明治34年）の中で、「近時国民体育ノ説甚タ盛ニシテ体力発展ノ方法ヲ規画セラレタルモノ多シ」<sup>12)</sup>と述べられており、社会的関心の高まりが推察できるのである。

さて、体格・体力改善を目指した体育の奨励に関する意見が、明治35年に相次いで戸山学校関係者によって発表されている（「軍隊体育ノ必要ヲ論ス」、「戦闘ト体力ノ関係ヲ論シ体操剣術ノ奨励ヲ望ム」）。これらは、同校における独自の研究成果に基礎を置いていたものと考えられる。また、軍医による生理衛生学の研究が、体操による体格・体力の改善という課題をへと促進させていったと考えられるのである。

陸軍関係雑誌にみられる体育記事は、明治30年を境に増加している。これは、徴兵検査で定尺者に満たない者が増加したことの影響から、国民の体格・体力問題が、社会的な関心につながっていった結果によるものと推察できよう。それは、日露戦争（明治36～37年）を控えて、兵員の増強を企画していた陸軍にとっては、重大な問題であったのである。さらに、明治34年以後は、国民の体格・体力問題の改善に関する記事が目立つようになっている。明治33年、義和団事件が起これ、日本軍は北清に列国の一員として進駐した。その際に、欧米兵との体格の差を痛感したのであった。伊藤博文は、そのときの感想を、

「体格ノ著シク矮小ナルカ為威容備ハラス風采ノ揚ラサリシハ特筆セサルヘカラル程心細ク感シタリ余カ邦人ノ体力改造ノ止ムヘカラサルヲ悟リ之ヲ以テ余カ畢世ノ事業トナサント決心セシハ実ニ此時ニ在リ」<sup>19)</sup>

と述べている。国民の体格・体力問題は、その改善策を早急に立てる必要が存在したのである。これが、雑誌記事の内容にも反映されていると考えられるのである。

#### 4. 結 論

陸軍を中心とした体力科学の研究は、明治、大正期を通じて、陸軍戸山学校などで活発に行われていたことが知られている。明治43年(1910)の「生理衛生学摘要」は、戸山学校で最初に刊行された体力科学の著書であり、続く大正3年(1914)の「日本人の体格及体育」とともに研究成果の集成でもある。しかし、これ以前の研究動向については、断片的に関連資料が指摘されているに過ぎず、不明確な点が多い。そこで本研究は、この時期の体力科学の研究動向を明確にすることを目的に、明治20～30年代を中心に、戸山学校の教育組織や授業の内容、そして、陸軍関係雑誌の調査分析を行った。この結果以下の諸点が明らかになった。

1. 体力科学の研究は、「体操」の実践を通じて、体格・体力を改善するという目的を持っており、この意味で、戸山学校における生理衛生学研究は一般生理学等とは異なり、運動生理・衛生学的な性格を持っていた。

2. また、このような研究方向が明確になってくるのは、明治29年の戸山学校における軍医の授業担当（生理・衛生）、下士官教科書（衛生学）の改纂などからみて、明治30年頃からであると推測される。

3. この時期の雑誌記事を見ると、「軍医学会雑誌」では、20年代の初めから、我国国民や壮丁の体格問題が論じられ、明治30年代の半ば頃からは、各国との体格比較が活発に行われている。また、「偕行社記事」を見ると、明治20年代から、戸山学校教官による「器械体操」、「体育」の身体的な効果が論じられ、30年代にはいと、さらに、体格・体力改善のための「体操」の必要やその奨励を論ずる記事がみられる。これらの記事内容からも、明治30年代に入ってから、（特に日露戦争を前後して）体力科学的な研究動向が次第に明確になってきたことがうかがわれ、前述の戸山学校での研究動向を裏付けていると考えられるのである。



参考文献一覧

- 注1) 「偕行社記事」は陸軍将校の親睦団体偕行社の機関誌であり、陸軍当局からは将校の研修教育雑誌として利用されていた。第一号は、明治21年(1888)に発行されている。
- 注2) 「軍医学会雑誌」は陸軍軍医の研究誌で、陸軍軍医学校創立(明治19年)前の明治17年(1884)に第一号が発行されている。
- 1) 秋山春済「器械体操ト外傷トノ関係」軍医学会雑誌, 101: 221-35, 1898.
  - 2) 秋山春済「器械体操ト外傷トノ関係附改良意見」偕行社記事, 219: 71-80, 1899.
  - 3) 秋山春済「器械体操ト外傷トノ関係附改良意見」偕行社記事, 226: 91-96, 1899.
  - 4) 秋山春済「器械体操ト外傷トノ関係附改良意見」偕行社記事, 228: 61-68, 1899.
  - 5) 蘆原信之「地方幼年学校ニ召集スベキ生徒ノ身長」軍医学会雑誌, 80: 73-75, 1897.
  - 6) 遠藤道孝「戸山学校体操剣術科学生体力増減ノ理由」軍医学会雑誌, 122: 589-593.
  - 7) 後藤良男「軍隊体育ノ必要性ヲ論ス」偕行社記事, 304: 13-20, 1902.
  - 8) 軍医学会雑誌「下士用衛生学教科書」軍医学会雑誌, 93: 502, 1898.
  - 9) 教育総監部, 陸軍教育史(明治別記第一二巻陸軍戸山学校之部).
  - 10) 細堀謙治「本郷連隊区内ニ収集スヘキ生徒ノ身長」軍医学会雑誌, 81: 554-63.
  - 11) 森岡市太郎「名古屋陸軍幼年学校生徒ノ一学期間ニ於ケル身体发育」軍医学会雑誌, 96: 829-43, 1898.
  - 12) 中村秀樹「国民体格ノ将来」軍医学会雑誌, 121: 519-20, 1901.
  - 13) 岡善次郎他「一年間ノ体重ノ消長」軍医学会雑誌, 130: 647-49, 1902.
  - 14) 岡善次郎「台湾守備兵ノ一年間ニオケル体重ノ消長」軍医学会雑誌, 112: 423-49, 1900.
  - 15) 大谷清「体操各種器械ノ効用」偕行社記事, 35: 1-7, 1890.
  - 16) 大谷清「体育要論」偕行社記事, 80: 5-14, 1892.
  - 17) 大谷清「体育要論(続)」偕行社記事, 81: 5-15, 1892.
  - 18) 陸軍軍医学校, 陸軍衛生学教程, 陸軍軍医学校, 1889. Pp.208.
  - 19) 篠尾明済「戦闘ト体力ノ関係ヲ論シ体操剣術ノ奨励ヲ望ム」偕行社記事, 294: 6-19, 1902.
  - 20) 篠尾明済「戦闘ト体力ノ関係ヲ論シ体操剣術ノ奨励ヲ望ム(続)」偕行社記事, 304: 13-20, 1902.
  - 21) 高橋新三「台湾行軍ノ体温脈拍呼吸ニ及ス関係」軍医学会雑誌, 116: 994-1004, 1900.
  - 22) 豊田修造「和歌山連隊区内学齡児童体育調査」軍医学会雑誌, 89: 1237-43, 1897.
  - 23) 矢嶋柳三郎「徴兵検査低減ニ関スル意見」軍医学会雑誌, 80: 75-78, 1897.
  - 24) 吉田米五郎「北海道ニ於ケル徴兵検査成績」軍医学会雑誌, 80: 212-23, 1897.